

## ヨハネ 20 章 11-29 節 「復活の主に出会う」

### 1A しがみつクマリヤ 11-18

### 2A 戸を閉じる弟子たち 19-23

### 3A 疑うトマス 24-29

#### 本文

ヨハネによる福音書 20 章 11 節から読んでいきたいと思います。イエス様が十字架に付けられ、その三日後のことですが、20 章 11 節から甦られた主に、直接お会いする人々の姿が出て来ます。初めにマグダラのマリヤ、それから十人の弟子たち、そして弟子のトマスです。私たちキリスト教会は、イエスが死者の中から甦ったという事実を良き知らせ、福音として生きています。福音書に書き記されていることを再び見つめて、私たち自身が、よみがえり、今も生きておられる主ご自身に出会い続けなければいけないという使命を確認します。

### 1A しがみつクマリヤ 11-18

11 しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。

20 章は、マグダラのマリヤがペテロとヨハネに、墓に行ったけれども、主のご遺体がなくなっている、誰かが取って行ってしまったと伝えたところから始まります。それで一目散で、ペテロとヨハネが墓にまで来て、その中にまで入りましたが、そこにイエス様を包んでいた亜麻布は置いてあるけれども、体そのものがなかったのをはっきりと見ました。その「体がない」という事実を、「誰かが主を取られた」と解釈したのです。そしてペテロとヨハネも、「体がない」ということを、「誰かが主を取られた」と解釈しました。しかし、その体がないということを、「主は甦られたのだ」というようには捉えませんでした。そのことを、主は十字架に付けられる前に何度となく、はっきりと語っていたにも関わらずです。

私たちが、確かに神は生きておられ、そしてイエスが神の選ばれた救い主のだと知ることができるのは、その「気づき」であります。もしかしたら、今日も何も変わらぬ、いつもと同じ日かもしれません。けれども、自分がそうだと思い込んでいる事実が、実は神が生きておられる、生々しい現実であることが多いのです。信仰とは、このような希望のある事実を確認していくこととよいでしょう。

そして本文に入りますと、マグダラのマリヤはペテロとヨハネに、主が誰かに取られていると言った後で、墓に戻りました。そしてそこでずっと泣いていました。ここではしくしく泣くのではなくて、

激しく、むせび泣いている感じです。そして、泣きながら墓の中をのぞいています。

12 すると、ふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとり頭のところ、ひとりは足のところに、白い衣をまとってすわっているのが見えた。13 彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」

他の福音書を見ますと、マグダラのマリヤ以外にも女たちが墓の所に来て、白い衣を来た人がそこにいたことを記しています。そして彼女たちに対して、イエス様は生き返ったのだと伝え、それを弟子たちに伝えなさいという言葉が聞きました。それでイエス様が語られた言葉を思い出して、弟子たちのところに行きます。おそらく、御使いはここでも、マグダラのマリヤに対して同じように語り始めようとしていたのではないかと、私は勝手に想像しています。ところが、マグダラのマリヤは、泣いて泣いて、それで押しが強かったのでしょう、相手に話す機会を与えないぐらい、強い口調で、叫んで「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」と言ったのだと思います。

マグダラのマリヤは、イエス様があまりにもかけがえのない存在であり、この方がいなければやっていけないという人物の一人でした。彼女は、ガリラヤ湖の北西の湖畔の町、マグダラ出身でありました。漁業で有名で、大変栄えていたユダヤ人の町です。ヘブライ語では、「ミグダル」と呼びます。ついでにマリヤではなくて、「ミリアム」がヘブライ語名ですね。

マルコ 16 章 9 節によりますと、彼女は「七つの悪霊を追い出された」とあります。悪霊を追い出されたということは、つまりとてつもない生活を送って来たのだと考えられます。レギオンにつかれた男の話は福音書に出て来ますが、墓場で鎖につながれていました。彼女も、まともな生活を歩んでいなかったことでしょう。ところが、イエス様が追い出してくださいました。そして彼女は、イエス様についていく女の一人になりましたが、これまで生活の基盤があった他の人たちに比べると、彼女は何もなくて、ただイエス様だけが頼りでした。それで、他の数人の女たちと共に、イエス様が十字架に付けられているのを遠くから見ている、またイエス様が葬られるのもよく見ていました。ですから、イエス様の体が取られたということは、彼女にはあまりにも衝撃的で耐えられなかったことなのです。遺体に対する敬意というのは、特にその地域の人たちであれば、これは大変な侮辱であります。それゆえ、彼女がイエス様にしがみついたのは、あまりにも自然なことでした。

私たちにも、特別な人がいたら、そうなることでしょう。自分が思っている大切な人が、突如、いなくなったとしたら…。そうした喪失感というのは、人であれば、また女性に多いかもしれません、しばしば人々を襲ってくるものですね。

14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。」16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)。」とイエスに言った。

御使いでは埒が明かないので、実はすぐそばにおられたイエス様ご自身がマリヤに話しかけ、なぜ泣いているのか、誰を探しているのかと尋ねておられます。それでも、マリヤは気づきませんでした。自分の思いがいっぱいになっていたからでしょう。また、イエス様ご自身の顔つきも変わっていたかもしれません。十字架に付けられる前にはこぶしで殴られていたし、変形してしまっていたかもしれません。分かりませんが、彼女はただ見ただけでは分かりませんでした。園の管理人だと思っていました。

しかし、彼女は気づきました。「マリヤ」と呼ばれたからです。たったこれだけのことで、彼女はラボニ！と叫んで、イエス様にしがみつきます。瞬時に彼女はイエス様であることを察知します。そうです、彼女はそれだけイエス様との親しさを持っていたのです。ルカによる福音書では、エマオの途上に歩いていた二人の弟子のところ、イエス様が現われました。彼らも気づいていませんでした。けれども、共に食事をしてイエス様がパンを裂かれて、それからイエス様がいなくなりましたが、その時に彼らはこの方がイエス様であったことに気づいたのです。なぜなら、弟子たちはイエス様と共にどれだけの回数、食事を共にしたでしょうか？共にパンを裂いたでしょうか？このような親しみがあつたからこそ、イエス様であると気づいたのです。

イエス・キリストを知るということは、こういうことです。救われるというのは、こういうことです。何か理論的な言葉を聞いて、知的に理解することではありません。知的な部分はもちろんありますが、イエス様のそばにいて、この方を親しく知るところに、救いがあり、永遠の命があります。永遠の命が、死んだ後にずっと生きられるというような天国への切符、あるいは長寿の薬のように考えたら間違いです。ヨハネは、第一の手紙の中でこう言いました。「1:1-2 初めからあつたもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわつたもの、すなわち、いのちのこゝばについて、このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあつて、私たちに現わされた永遠のいのちです。..」

私は、クリスチャンではない方々から多くの質問を受けます。キリスト教についての質問は受けるのですが、キリストご自身についての質問はあまり受けません。「カトリックとプロテスタントはどう違うのですか。」「なぜキリスト教は戦争をするのですか。」「自分は仏教なのですが、墓はどうし

たらよいでしょうか。」このように、キリスト教を組織として考えて、そこに所属するというように考えています。けれども、イエスは誰ですか？という質問は少ないですね。歴史上の人物であったとしても、それと自分にどう関わりがあるのかわからない…。その時には、足元を見ると良いですね。私たちには「これがなければ生きていけない」という、かけがえのないものがないでしょうか？「あまりないですね。」と言われるかもしれません。そういつている私のようなおじさんは、自分の奥さんがいなくなったらどうでしょうか？では、飲んでる水はどうでしょうか？お風呂に入ることはどうでしょうか？毎日のニュースを見ることはどうでしょうか？人は、親しくしている存在に飢えています。イエスが、まさにその友になるのだというのが、私たちが伝えている福音であります。

20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」20:18 マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました。」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたことを弟子たちに告げた。

イエス様はここで、意味深々なことを告げられます。まず、「わたしにすがりついてはいけません。」と言われます。ここで翻訳が大事なのですが、「わたしにすがりついてはいけません」ではなく、「すがりついてはいけません」と言われています。マリヤは、絶対にイエス様から離れないとして、固くつかんで離さなかったのでしょう。けれども、そのままでいてはいけないのだとイエス様は言われるのです。

そして、「わたしはまだ父のもとに上っていないからです。」と言われるのです。これは、どういうことか？イエス様は、四十日間、地上にこのままおられて神の国について弟子たちに語られます。それから天に昇られます。オリーブ山から昇られました。そして、天において神の御座の右に着座しておられます。そして戻って来られるのですが、それはまだ起こっていません。しかし、よみがえられてから 49 日後に、すなわち天に昇られてから 9 日後に、聖霊が弟子たちに降るのです。そして聖霊によって、イエス様はご自身が彼らと共におられると約束しておられました。「ヨハネ 14:16-17 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」マグダラのマリヤは、今、イエス様にしがみついています。もうそういうことはできなくなります。天に昇られるからです。けれども、今、マリヤがイエス様に親しみをもって近づいている、その結びつき以上のことが、実はイエス様が物理的におられなくなった後の方で、起こることです。もうひとりの助け主である聖霊が、私たちと共におられ、また内に住んでくださるので、物理的にイエス様がおられる以上に、霊的にこの方を親しく知ることができるというこ

となのです。

イエス様は何度も何度も、そのことを約束しておられました。「14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」共に住んでくださる、そして「わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。(6:56)」とも言われました。そんなこと、夫婦がどんなに親しく関わっても、ありえないことです。霊的に可能なのです、肉体、感情、精神以上の深いつながりを、イエス様は聖霊によって結んでくださいます。

そして、「わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」と言われます。これも驚くべき発言です。イエス様は、彼らにとって主であります。しかし、今、兄弟と言っています。なぜなら、イエス様と父なる神の間にあるその交わりの中に、彼らも招き入れられたからです。「15:13-15 人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」

これまで弟子たちは、天地を造られた神に対しては、イエス様に尋ねていたのです。イエス様は父なる神の元におられるから、イエス様に願い、そしてイエス様をご自分の父に願ってもらっていました。ところが、そうではないとイエス様は言われます。神はあなたの父になったのです、だからあなたがわたしの名によって求めなさいと言われます。「ヨハネ 16:23 その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」このような親しい交わりを持ってくださり、イエス様は兄弟たちの長男になってくださるのです。「ローマ人 8:28-29 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多く兄弟たちの中で長子となられるためです。」神が、ご自分を愛する者たちの間で働いてくださいます。すべてのことを益に働かせてくださいます。それは、私たちにとっての益ではありません。イエス様が私たちの兄弟となられて、神の働きを私たちによって行ってくださるところに益であります。

## **2A 戸を閉じる弟子たち 19-23**

こうやって、マグダラのマリヤはイエス様に会いました。彼女は弟子たちに伝えます。

19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」20 こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。

イエス様は弟子たちに会って下さいました。まだ同じ日曜日です。明け方にマグダラのマリヤは墓に行っていますが、いつイエス様が現われてくださったのでしょうか、お昼でしょうか、分かりません。そして既に同じ日の夕方になりました。そして、「ユダヤ人を恐れて戸がしめてあった」とあります。なにを恐れていたのでしょうか？彼らは、恥を見たからです。エマオの途上であった二人の弟子が、本人だと気付かずイエス様に対して、イエス様についてこう語り始めました。「ルカ 24:19-21 この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。」そうです、命をかけてイエス様に従ってきて、この方がイスラエルを贖う、イスラエルを救ってくださると思っていました。ところが、十字架刑で死んでしまったのです。簡単に言うと、「騙されてしまった、詐欺にあったカルト集団」のようなものです。身も心も、全て捧げたのに、それがかなわなかったという失望であり、恥であります。ですから、ユダヤ人たちから偽物、偽預言者に従った者たちとして石打ちにあってもおかしくなかったのではないのでしょうか。だから、恐れて戸を閉めていました。しかし、その真ん中にイエス様が来られて、「シャローム」「平安があるように」と言われたのです。

私たちは、自分が命をかけていたものが、取り外されて、それで落胆した、失望したことはないでしょうか。ここにいる弟子たちのように、そうした失敗はひた隠しにしている、恐れていることはないでしょうか？そのようになっているのは、実はイエス様が敢えてそのことを許されたとも言えるでしょう。そこに期待をかけていたが、実はイエスがおられる。この方は、すでに世に勝利されていて、勝利された方が共におられます。共に住んでくださいます。ゆえに、すでに平安があるのです。子の平安はかけがえのないもので、世が取り去ることはできません。「人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。(ピリピ 4:7)」

そしてイエス様が、戸を閉じているところに現れて、かつ、肉体を持っておられたことに注目してください。復活の体であります。主は目に見えなくてもおられます。それと同時に、肉体がないのではなく、幽霊ではなく、肉体はあります。体をもって復活されたのです。ここに、生きておられる主に出会うという意味合いがあります。それは、まず主がどこにでもいることがおできになる、ということです。それと同時に、主は今、自分の目に見える現実の中にいてくださるということです。主は生きておられ、現実なのです。何か心の中で、いいかなあと思うことを話しているではありません。主が生きておられ、私たちの生活のど真ん中で現実にご働いてくださるのです。

21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」22 そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」

イエス様は、再びご自分と御父との関係に弟子たちを招き入れています。イエス様が父なる神から遣わされました。同じように、弟子たちをイエス様が遣わします。交わりのみならず、福音を宣べ伝える働きにおいても、同じ権威が与えられます。罪を赦すことについて、イエス様が赦されるように、その赦しを宣言します。そしてイエス様の権威によって、だれかが拒むのであれば、罪がそのまま残ることも宣言します。つまり、教会とイエス様は一体になってくださいます。そして、その力が与えられるのは、聖霊によるものなのです。イエス様が息を吹きかけて、「聖霊を受けなさい」と言われました。初めての人アダムを神を造られた時、息をその鼻に吹きかけて生きるものとなりました。同じように、弟子たちに聖霊による息を吹きかけられて、彼らは霊的に生きる者とされました。

ですから、もはや、福音を恥とすることはありません。期待を裏切られることはありません。希望は失望に終わりません。これまで不確かなところに期待をもって生きていたところが、イエスこそが変わらぬ、頼れる岩なのです。

### **3A 疑うトマス 24-29**

こうしてマグダラのマリヤがイエスに会いました。弟子たちがイエスに会いました。そしてそこに一人、たまたま居合わせていなかったトマスがイエス様に会います。

24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

トマスは、とても物事を分析する人でした。人々が、感情が高鳴っているときも、彼は現状を見ていました。ゆえに、自分の理性がかえって邪魔になりました。今、確かに自分の目でイエス様の体を見なければ、私は決して信じませんと言っています。

26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように。」と言われた。27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

イエス様は同じように、平安がありますようにと言われていました。そして、前と同じように戸が閉じられている時にその真ん中に現れました。そしてイエス様は、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。」と言われてます。つまり、イエス様は八日前、彼らが集まっている時にその時におられて、トマスが言った言葉を聞いておられたのです。目に見えなくとも主はおられるのです。

28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

トマスが、聖書の中で最もはっきりとしたイエス様についての告白をしています。イエス様が自分の主であり、かつ自分の神です。ただ主なる方だけでなく、神ご自身なのです。そのことを明確に知りました。父なる神とイエス様は一つであることを知りました。

そしてイエス様の言葉も大事です、「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」見ずに信じる者が幸いなのです。私たちの信仰はここにかかっています。信仰というのは、見ていないから信じるのです。自分の願っていることや、思い浮かんだことを信じるのではなく、確かなもの、確実なもの、そして希望のあるものを信じるのです。「信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル 11:1)」ちょうどそれは、どんなに天気が雨であっても、飛行機で飛べば、必ず上空は快晴であることを知っているように、目に見えなくとも、確実にそうであると知っているものであり、希望があります。

皆さんの中に、「目に見えるしか信じられない」ということがあります。けれども、私たちは目に見えないものを信じながら生きています。空気は目に見えますか？でも、空気は否定しないでしょう。そして、私たちの中でここで誰かが銃を取り出して、乱射するわけがないと信じています。だから、安心してここにいます。目で見ているものだけを信じているのではなく、見えるものの背後にある見えないものを信じながら生きています。イエス様に出会いたいですか？見ずに信じる者は幸いなのです。